源氏物語新組香

上

氏物語新組香

上

三條西堯山著

新生活社

著者略歴

三条西堯山（公正）。大正15年東大卒，宮内省図書寮編修官，帝室博物館鑑査官歴任。実践女子大学教授，御家流香道家元。草仮名帖その他の著書あり。

昭和二十九年五月十五日　印刷
昭和二十九年五月二十日　發行

源氏物語新組香 上
定価　四五〇円

著者　三條西堯山
印刷所　新紀元社
発行所　新生活社
東京都千代田區神田駿河台二ノ五
電話　神田(29)四三二〇
振替　東京四三三〇一

はしがき

源氏物語と御香とは因果的関係を有つてゐる。平安朝の昔紫式部は香合を資料として物語の一場面に想を練り筆を馳せた。私共はその描写を梅が枝の巻に見るのである。それによつてあの華やかな藤原時代の最上層社会の人々の斯道に対する興味はもとより、それに対する苦心・努力・研究の態度をはじめ造詣の一端が次から次へと想像されて来るのは独り私だけの妄念の結果ではあるまいと思ふ。ひとしく我が国の古典文学に興味をもつ者にとつては憧憬の的であるに相違ない。彼等の生活がどんなに美しいものであつたらうかとは源氏を読む者が一度は必ず想ひ浮べてみる過程であらう。その美しい生活の一つに御香の事が見えるのは私共にとつては一層嬉しい次第である。源氏物語だけが御香に関するお話を伝へてゐるのなら又外に考へ方もあるが、紫女と時を同じうして同じ所に同じやうな生活をしてゐた清女も亦御香の事を其の著書枕草子の中で述べてゐるのだから、此の時代の人々にとつて御香は生活から放せられないものであつた事も知られる。もし生活と遊離したものであつたならば、第一、源氏物語の一つの資料ともならなかつたであらう。物語に織り込んでも喜ばれるものであつた処にも、御香の此の社会に於ける位置が知られる。

源氏物語によつて、当時流行した御香は練香であつた事が明かに知られる。この練香を物語では薫（たきもの）

と呼んでゐる。当時の人は日常趣味に用ゐるものを薫と云ひ、仏前に供へるものとは区別してゐた。その事も源氏物語を通読すれば自から知られて来る。生活に即してゐたものは薫であつた。此の薫によつて匂ひの種々の世界が醸されてゐた。それは上品な楽しい世界であつたに相違ない。代表的なものに薫合があり、源氏物語の梅が枝の巻に其の様子が面白く美しく描写されてゐるのは人のよく知る処である。薫合は其の後種々に発展して今日の組香に到つてゐる。例へば香合とか炷継香（焚合）などがいづれも薫合を祖先としてゐる事は注意する迄もない。今それ等の説明をするのは本旨でないから他日の問題とする。

考へ方によつては、源氏物語の或る巻は薫によつて作られてゐると云つても過言ではあるまい。その物語が出来てから何百年かの時間が流れたが、江戸時代の中頃になると、源氏物語によつて新しい組香が香道の専門家の手で作られた。其の中で一般的なものに源氏香とか空蟬香とか源氏四町香などがあるが、源氏五十四帖が全部組香とされて源氏物語千種香と云ふ名称で香席を賑はしたのも享保年間の前後であつた。しかし其の後斯道の不振は、終にさうした立派な組香が作られてゐる事さへ忘れられてしまつた。忘れられたにせよ、さうした作品が現はれたのは事実である以上、源氏物語と御香とは如何に密接な関係をもつてゐるかが知られる。私はそれ故に源氏物語と御香とは因果的関係を運命づけられてゐると云ふのである。

源氏物語の昨今の流行は実に目映いばかりである。お芝居にもなれば映画にも現はれる。それにつれて種々の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ものが色々の角度で源氏の銘を打つて世に生れてくる。私達は今更その流れを汲む勇気は持たぬ。しかしこんなにも源氏物語が流行してゐる時、香の分野では往時の巨匠が之に手を染めたきりで、忘れられてゐるのは残念だと思ひ、こんなに源氏ばやりとならぬ頃、ひそかに同好の間で研究し合つて来たものがあるので、それをとにかく世に公にする事にした。今後の研究の参考になれば一同の満足これに越すものはない。私達の研究は思ひ切つて新機軸を出した。例へば複合的組香の可能性を発見したのなど其の一つであり、この研究の特徴の一つでもあらう。或は又香組に於て新しい解釈を公開したのも独特な世界である。

組香の創作は山本霞月・大倉久美子・大倉直介・小林瀧子・沖田武子の諸氏と三条西堯山との六名で共同的研究を行つたものである。源氏物語原典としては岩波文庫本を主とし日本文学大系本を参考に用ゐ、訳本としては谷崎本、与謝野本、空穂本など現代語訳のものを用ゐた。之は同人がその面での素人であるために古註ばかりも見てゐられなかつた事と、今一つには組香に重点を置いたために、訳の方は権威ある現代もので満足したのである。しかし時により場所に応じては評釈位は参考とした。組香の場合には源氏千種香などを注意してゐるが、必ずしもそれにこだはらない事とした。原典にせよ訳文にせよ、それを熟読して其処から醸される感情を香的に表現する事に努力した。従つて各人の香的創作である。源氏物語を香の分野で考へてゐるのである。それは千種香の現代訳ではなくて、千種香を現代香人の手で発展せしめた筈である。此の研究に於て私共は皆こよなき喜びと香の世界の深さをしみ〴〵と感じて、今猶ほ不足の部分の創作にいそしんでゐる。それ等は又後日発表する事と

して、一応完成した各巻の組香を上中下三冊にまとめる。この上巻では桐壺の巻から須磨迄を取扱つてゐる。

御香を楽しむ人が必ずしも源氏物語に興味のある人ばかりとは限らない。大概の人は中学なり女学校で一度は源氏物語を読んだ筈であるが、それは多く部分的に代表的文学価値の高い箇所を読まれたに過ぎぬであらう。而かも何十年か前にと云ふ方々も多々あらう。さうした方々の一面に於ては記憶を呼び起すために、又一面では組香を楽しむ方々の参考のために、此の新組香には梗概と解説とを施す事とし、それを三条西堯山が担当した。その内で梗概は原典から拙い文で書き改めるよりも、立派な権威ある谷崎本に拠る方が読者のためになると思ひ、大部分はそれをもととして書を改める事とした。

此の本を読まれた方々が、自ら香組をされる場合の参考に、私共が実際に行つて興味の深かつた香組を載せる事にした。初学の方々の手引ともなれば、それこそ本望である。此の香組は大部分山本霞月宗匠が組んだものである。

最後に此の小冊子が世に送られるに当つて種々お骨折下さつた畏友小濱純孝氏と折からの御病気をもかへりみず出版の為めに専心尽力された吉永芳之氏とに、心から感謝の意を表する。

昭和二十九年四月　　著者

目

次

はしがき……一
桐壺香……三條西堯山……一
帚木香……大倉直介……一七
空蟬香……三條西堯山……三九
夕顔香……大倉久美子……四七
若紫香……大倉直介……六一
紅花香……三條西堯山……七七
紅葉賀香……沖田武子……九九
面影香……沖田武子……一二四
濡衣香……沖田武子……一三三

花宴香……三條西堯山……一四五
葵香……山本霞月……一五九
賢木香……大倉久美子……一八九
花散里香……大倉直介……二一七
浦波香……沖田武子……二二九

桐壺香

一　組香式

香五種

帝弘女更御　徽殿御衣所息

2 T
5 T
4 T
9
1
10

帝　二包、内試一包
弘徽殿　二包、内試一包
女御　五包、内試一包
更衣　四包、内試一包
御息所　一包

二　方法

先づ帝・弘徽殿・女御・更衣の試香を順次に焚き、次に本香では残りの全部十包をよく打ち混ぜてから一包づつ焚く。聞くには香札を用ゐたいが、其の場合には特別のものを用意せねばならぬので、さうした準備の出来ない場合は手記録でもよい。

特別な香札と云ふのは普通用ゐられてゐるものと同形だけれども、模様とか符号が附いてゐないもので、其の時に応じて裏表の名称を朱書して用ゐるやうに作られたものを云ふ。この場合香札の表の名称は左の如く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

附する。

清涼殿　梨壺
後涼殿　藤壺
寝殿　雷鳴壺
渡殿　梅壺
細殿　桐壺

三　記録の下附

皆の場合は　光源氏
御息所の中は　安からず
御息所不中は　なくてぞ

梗概

今からどの位以前の事だつたか明瞭には覚えてゐないが、御所には美しい女御や更衣達が沢山仕へてゐる。その内に身分の高いと云ふ程の女ではなかつたが、目立つてお上のお気に入りの女があつた。その為めに初めから自分こそはと自信たつぷりで上つた女達は可憐さうな程存在がうすくなつたので、其の御寵愛を蒙つてゐ

る人に向けられる中傷とか嫉視と云ふものは実に烈しい。口の悪い女達は楊貴妃の例まで持ち出して騒ぐやうになつたが、お上の御寵愛を頼みにして御仕へ申上げてゐる間に、前世の御契りも深かつた為めとでも申すのか、世に稀な程美しい玉の男御子がお生れになる。さうなるといよ〳〵女達の心は穏かに行かない。先づ第一に皇子の御母である弘徽殿の女御がヤケはじめる。それにならつて他の女御や更衣も嫉妬心が加はつてくる。遂には其の連中で協同して此の御気に入りの女をいぢめる。余り度が過ぎるのでお上も気の毒に思召し其の女の局を御側近くに移される。元来このお気に入りの人の局は桐壺と云つてお側からは余りにもはなれてゐた為めに種々同僚達に邪魔をされてゐたのであつた。そして此の女は女御ではなくて更衣出身だつた事も亦皆から嫉まれる一つの種であつた。この女が桐壺の更衣と呼ばれるのも其の局の名と身分とによつて附けられた名称である。桐壺の更衣は玉の男御子を生み奉つてからは、慣例のやうに御息所と呼ばれてお仕へ申上げてゐたが、丁度男御子が三才になられて盛大な御袴著が行はれた後、其の年の夏とう〳〵急に死んでしまつた。お上の御悲しみは申迄もない。生前に女御としてやれなかつた事が先づ御心をいため桐壺の更衣に三位の位を贈らせられた。一方更衣をいぢめてゐた女達もいざ更衣が亡くなつてしまふと急にその人柄なども思ひ出されて「なくてぞ」とはこんな時の気持を云ふのかしらなどと後悔する。お上の御追憶にはきりもなく止めどもなく渉らせられるが、僅かに更衣が生んだ男御子を御慈しみになることでまぎれて居られる。やがてこの男御子を高麗の人相見の予言を御信じ遊ばして、十二才の時元服の式を行はせられた時、源氏の姓を賜はつて臣籍にお降しにな

る。普通光源氏と呼ばれるのはこの君の事で、此の物語の主人公である。

組　香

此処では桐壺巻の頭初の部分が取扱はれてゐる。所謂光君が誕生する迄の部分である。桐壺巻で主要な人物と云へば帝と桐壺更衣とで充分とも云へようが、今少し念を入れると弘徽殿女御の存在も必要となつて来るし、桐壺更衣の果敢ない一生を考へる上には沢山の女御や更衣の存在を忘却するわけには行かない。そこで此の組香ではそれ等の人々を以つて要素としてゐる理由が知られるであらう。そして更衣を要素の一つに加へてゐるから、当然桐壺の更衣が彼女達と区別をせられなくてはならない立場になるので、特に御息所の称を用ゐてゐる事も首肯出来る。物語でも桐壺の更衣の病む段の処では、

其の年の夏、御息所はかなき心地に煩ひて、まかでなんとし給ふを

と更衣の事を呼んでをり、更に

年月に添へて御息所の御事をおぼし忘るゝ折なし

と帝の御追憶を述べた処などがあつて、御息所は桐壺更衣を指してゐる。それ故に此処で御息所の称を組香上に用ゐるのは単に妥当だと云ふ意味ばかりでなく、玉の御子を産み奉つた女(ひと)だと云ふ事も知られて来るのに気附く。従つて時間的な問題も附随的に生じて来る。組香骨子をなす名称に就いては、御息所だけが多少問題視される位

で、他は別に異論はない筈であり、問題視されがちな御息所の名称に就いても上述のやうに考へてくればさほど不都合ではない。故に此の名称に就いては一応容認せらるべきである。さすれば次に検討すべきは試香である。試香の存在に就いては種々考究すべき場合があるが、此の組香の場合は試香は時間を表現してゐるものと解すべきである。単なるテストと云ふ域に置かれてゐるのではない処に此の組香に於ける試香の特徴がある。然らば何処に其の時間的表現があるか。既に気附かれてゐる読者もあらうが、又寝語のやうに感じてゐる読者もきつとあるに相違ない。それは無理もない事で、従来多くの香人は現はれてゐるが、試香の性質を研究した者が果して幾人ゐたであろうか。又現在の香人にして試香に注意をするものが果してゐるであらうか。試香はテストとして考へられてゐる以外に、何んの作用も意義も見出し得ないのが普通である。それ故にこそ香に対する認識が欠けて行くのであり、従つて香道の進歩も無いのである。試みに読者諸君が自ら一度考へて見られるがよい。何者かに必ず触れるはずである。其の時始めて香を云々する力がつきはじめたのであり、香道発展の黎明を見るのである。単なるおてまいに終始するのが香を護る所以ではない。護ると云ふのは維持する事であり、それは退歩の前兆である。今日香道の衰微を歎く香人はザラに居るが、如何にして発展せしめるかを考ふる宗匠に至つては果して幾人居るか。せい〳〵おてまいの復興・其の優美さへの陶酔に尽きる。それも結構であるが、香道には幾多の考へるべき問題が手近に存してゐる事を忘れてはならぬ。この試香などの場合も其の一つのよい例である。成程テストだと云つてすませばそれでもすむ。しかしそれでは物足りなさを覚えぬであらうか。さうした感覚がなければ

一生香に親しんでも遂に香道の真髄は摑めぬであらう。

ペンが大部横に馳つてしまつたがさうした論は他の機会に譲り、もとにもどる。此の組香に於ける試香は時間を表現してゐるのである。それは極簡単に説明すれば、御息所に試香が無い事によつて知られる。即ち御息所が試香を持たぬと云ふ事は、少くとも香的には御息所が帝以下の方々の処へは後に現はれて来る事を意味してゐる。弘徽殿達より後に側近に上つた者と云ふ意味を表はしてゐる。源氏物語に於ては、其辺は明瞭には書かれてゐないが、桐壺更衣がかなり後に側近に上つたに相違はない筈である。もし仮りにお気に入りの桐壺更衣が早く上つてゐたとすれば、

女御更衣あまたさぶらひ給ひける

必要はなかつたはずで、そこには暗に桐壺更衣が後から上つたのにもかゝわらず、一身に御寵愛を集めたと云ふ意が見られる。それを香的に表現してゐるものが試香の無いと云ふ形で成立してゐるのである。更に言葉を加へると、

女御更衣あまたさぶらひ給ひける

と云ふ物語の文章を明かに解釈してゐるところに意味があるのを味はなくてはならぬ。御息所の側近に上つたのを他の女御や更衣よりも後の事と解してゐるのは、それ等の女(ひと)達との間に時間的差違がある事に他ならぬ。故に此の組香に於ける試香は、時間を表現したものであると考へなくてはならぬ理由が首肯される。試香に一つの意

味が明瞭にもたらされてゐる点に、先づ見逃すべからざる特徴があるのは注意に価する。

次に考ふべき問題は、使用されてゐる香の量に関してである。香の種類は構成上から五種と定められてゐるが、其の五種の香の量は均一ではない。本香に於て帝と弘徽殿女御と御息所とが、いづれも一包と規定されてゐるのは別に異議はない。しかし女御と更衣とに対しては、前者を四包とし後者を三包と定めてゐる点に就いて何等かの説明が要求されるであらう。勿論此の両者は等量であつてもよいはずであるが、敢て量の上に差が附けられてゐるのは一面では技巧的意味として考へられる。その技巧は、此の組香を十炷香に終止せしめんとする作者の意図の現はれに他ならぬ。十炷香とするに当つて、前に述べた帝・弘徽殿女御・御息所にそれ〴〵一包づつを使用するからには、残るところ七包となるより外はないので、その七包を如何に配分するかと云ふ事になるのである。そこで之を作者は四と三とに分けたまでの事で、さほど深い意味はないものと解してよいであらう。しかし一度そのやうに分けて規定されてくると、そこには一つの意味附けが自から生れてくる。女御四包、更衣三包とある事によつて女御の方が更衣より量的に多いのは注意するまでもないが、此の事は源氏物語に於ける「女御更衣あまたさぶらひ給ひける」と云ふ所を香的に表現すると同時に、此の処を解釈して女御の方が更衣より多かつたのだと見てゐる趣きが知られる。女御が果して多かつたか、それとも更衣が多かつたかは人々の見解に従ふより致し方がなからう。たゞ此の女御と更衣と云ふ部分に於いて量的に他のいづれの部分より多いと云ふ事だけは明瞭であつて、其処に「あまたさぶらひ給ひける」有様が表現されてゐる事を見逃がさなければ作者の意図も十分に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com